

第二章 國人に捨てられし時

愛國は人性の至誠なり、我の父母妻子を愛する強ひられて之を爲すにあらず、愛せざるを得ざればなり、普通の感能を供へしものにして誰か己に生を與へし國土を愛せざるものあらんや、鳥獸且つ其棲家を認む況んや人に於てをや、曾てユダヤの愛國者がバビロン河の邊りに坐し、故國のジオンを思ひいでて、涙を流して彈じて曰く、

エルサレムよ、もし我汝をわすれなば、

わが右の手にその巧をわすれしめたまえ、

もし我汝をおもいいず、

もし我エルサレムをわがすべての歡喜の極となさずば、

わが舌を顎につかしめたまへ、

(詩篇第百三十七篇)

と、これ愛國なり、他にあるなし、この眞情はわが靈に附着するもの、否な、靈の一部分にして、外より學び得たるものにあらざるなり。

「如何いかにして愛國心を養成すべきや」とは、余輩が暫々耳にする問題なり、曰く國民的の文學を教ゆべしと、曰く國歌を唱へしむべしと、然れども人若し普通の發達を爲せば彼に心情の發達するが如く、彼の軀體の成長するが如く、愛國心も自然に發達するものなり、義務として愛國を呼稱するの國民は愛國心を失ひつゝある國

民なり、孝を稱する子は孝子にあらざるなり、愛國の空言（かまびす）喧（かまびす）しくして愛國の實跡を絶つに至る、余は國を愛する人となりて、愛國を論ずるものとならざらんことを望むものなり。

故に余は余の日本國を愛すと云ふは是決して余の徳を賞讃するにあらずして一人並の人間として余の眞情を表するなり、余は米國が日本に勝りて富を有し技藝の盛なるを知る、然れ共余は富と技藝との故を以て余が日本に與へし愛心を米國に與ふる能はざるなり、英國の政治、伊國の美術、獨逸の學術、佛蘭西の法律は余をして日本人たるを嫌惡せしめし事は未だ曾てあらざるなり、コトバキシの高きは芙蓉の高きに勝ると雖も後者が余の胸中に喚起する感情の百分の一だも余は前者の爲に發する能はざるなり、否な、コトバキシを見て却て芙蓉を思ひ、ミシシピを渡りて石狩利根を想ふ、是眞情なり、決して余一人の感覺にあらず、普通一人並の大和男子にして此感なきものは一人もあるべからざるなり。

然れ共若し愛國も眞情なれば眞理と眞理の神を愛するも亦眞情なり、而して完全なる社會に於ては二者決して睜着すべきものにあらざ、國の爲めに神を愛し神の爲めに國を愛し、國民擧て神聖なる愛國者となるべきなり、如（かくの）斯社會に於て人若し國に捨てられしならば即ち神に捨てられしなり、其時こそ實に人民の聲は神の聲にして、
(Vox populi est vox dei)、國に捨てられしとて天にも地にも訴ふべき人も神も存せざるなり。

然れども世には眞正の愛國者にして國人に捨てられしもの其人に乏しからず、耶蘇基督（イエスキリヤス）其一人なり、ソクラトス其二人なり、シピオ、アフリカナス其三人なり、ダンテ、アリギエーリ其四人なり、而して公平なる歴史家が判決を下すに當て、是等人士の場合に於ては罪を國民に歸して捨てられしものゝ無罪を宣告せり。

余は現在の此余自身を以て不完全なるものと認むると同時に亦今日の社會を以て完全なるものと認むる能はざるなり、而して余の國人に捨てられし、罪或は余にあらん、余の不注意なりし其一なり、余の過劇なりしは其二ならん、余の心中名譽心の尚ほ未だ跡を絶たざるあり、慾心も時に威を逞ふするあり、余の此不幸に陥りしは或は是等の爲めならむ乎………

：

………
ア、今之を謂て何をかせん、斯く記するさへも余が陰然と余自身を辨護しつゝありと余の愚を笑ふものもあらん、今は余の口を閉づべき時なり、しかして感謝すべきは余は默止し居るを得ればなり、勿論普通の情として忍ぶべきにあらざるなり、余は余の國人を後楯となし力めて友を外國人に求めざりき、余は日本狂と稱せられて却て大に喜悅せり、然るに今や此頼みに頼みし國人に捨てられて、余は皈るに故山なく、需むるに朋友なきに至れり、如斯ありしと知りしならば友を外國に需め置きしものを、如斯ありしと知りしならば余の國を高めんが爲めに強く外國を譏らざりしものを、余の位置は可憐の婦女子がその頼みに頼みし良人に貞操を立て、むが爲め頼りに良人を頌揚たる後或る差少の誤解より此最愛の良人に離縁されし時の如く、天の下には身を隠すに家なく、他人に顔を會し得ず、孤獨淋しさ言はん方なきに至れり。

此時に當て嗚呼神よ、爾は余の隱家となれり、余に枕する場所に至て余は爾の懷に入れり、地に足の立つべき處なきに至て我全心は天に逍遙するに至れり、周圍の暗黒は天を窺ふに當て必要なるが如く、三階の天に登り、

永遠の慈悲に接せんと欲せば、下界の交際より遮斷さるゝに若かず、國人は余を捨て、余は靈界に受けられたり。

斯土このの善美は今日迄余の眼を暗くらませり、如何にしてその富源を開かん乎、如何なる國民教育の方針を取らん

乎、如何なる政略を以て海外に當らん乎、其世界に負ふ義務と天職とは如何、ペリクリス時代の雅典アテ、メデチの

フロレンス、エリザベス女王の英國、フレデリック大王の普魯士プロシヤは交々余の眼に浮び、我國をして之に爲さんか

彼に爲さんかと、寐ねても醒ても余の思想は斯國土より離れざりしなり、眞にや古昔のギリシヤ人は現世を以て最

上の樂園と信じ、彼等の思想は現世外に出しこと實に希なりしとは、余も余の國を以て満足し、此世に勝る世界

としては詩人の夢想到讀みしかど、又牧師の説教に聞きしかど、余が心中には實在せざりしなり。

余の國人に捨てられしよりは然らず、余の實業論は何の用かある、誰か奸賊の富國策を聽かむや、余の教育上の主義、經驗は何かある、誰か子弟を不忠の臣に委ぬるものあらんや、余は斯土に在て斯土のものにあらず、斯土に關する余の意見は地中に埋没せられて、余は目もなき口もなき無用人間となりたり。

地に屬するものが余の眼より隠されし時始めて天のものが見へ始まりぬ、人生終局の目的とは如何、罪人とは罪を洗去るの途みちあるや、如何にして純清に達し得べきか、是等の問題は今は余の全心を奪ひ去れり、而して眼を擧て天上を望めば、榮光の王は神の右に坐するありて、ソクラツト、保羅パウロ、コロンウエルの輩數知れぬ程御位の周圍に坐するあり、荊棘いばらの冠を頂きながら十字に登りし耶蘇基督イエスキリストと、未來を論じつゝ矢鳩答毒を飲みしソクラツト、異郷ラベナに放逐されしダンテ、其他夥多の英靈は今余の親友となり、詩人リヒテルと共に天の使に導びかれつゝ、球より球まで、星より星まで、心靈界の廣大を探り、此地に決して咲かざる花、此土に未だ見ざる玉、

聞かざる音楽、味はざる香味、余は實に思わぬ國に入りたりけり。

實に此經驗は余に取ては世界文學の註解書となれり、エレミヤの慨歌は今註解書に依らずして明白に了知するを得たり、放逐の作と見做してのみダントの「デイビナ、コメヂヤ」は解し得るなり、殊に基督彼自身の言行録は國人に捨てられざるものゝ如何で其廣其深をそのひろさそのふかき探り得べくむや、然り余は余の國人に捨てられてより世界人(Welmann)と成りたり、曾てホリヨーク山頂に於て宇宙學者ハムボルトが自筆にて名を記せるを見たり、曰く、

Alexander von Humboldt,

In Deutschland geboren,

Ein Burger der Welt.

獨逸國に生れたる世界の市民

アレキサンデル、フホン、ハムボルト

嗚呼余も今は世界の市民なり、生を斯土に得しにより、斯土の外に國なしと思ひし狹隘なる思想は、今は全く消失せて、小さきながらも世界の市民、宇宙の人と成るを得しは、余の國人に捨てられしめで度結果の一にぞある。

然らば宇宙人となりしに由り余は余の國を忘れしか、嗚呼神よ、若しわれ日本國を忘れなば、わが右の手にその巧を忘れしめよ、若し子たるものがその母を忘れ得るなれば余は余の國を忘れ得るなり、無理に離縁狀を渡されし婦は益々其夫を慕ふが如く、捨てられし後は國を慕ふは益々切なり、朝は送るに良人なく、夕は向ふるに戀

人なく、今は孤獨の身となりて、齊といのふべきの家もなく、閑暇かんか勝よにて余所事に心を使ひ得るにもせよ、朝な夕なに他の女子が其良人を勞るを見て、我獨り舊時の快を忘るべけんや、嗚呼神よ我が良人をして恙なからしめよ、彼の行路をして安からしめよ、今我は彼に着き纏ひ心を盡す能はずとも、若し我が祈禱だにして彼を保護するに力あらば、此賤婦の祈禱を受けて彼の歩行を導きたまへ、尚又此身にして彼の爲めに要せらるゝならば何時なりとも爾の御意みごころに委まかせ彼の爲めに使用し賜へ、此身は爾のものにして爾の爲めに彼に與へしものなり、我に屬せざる此命は彼の爲めには何時なりとも捧ぐべしとは已すでに爾の前に誓ひし處なり。

然れども神よ、若し御意ならば我をして再び我夫の家に歸らしめよ、勿論我は爾を捨てゝ我夫に歸る能はざるなり、是爾に對して罪なるのみならず我夫に對して不貞なればなり、爾のしろしめす如く我夫に天地の正氣鍾あつるあり、その壯宏たる富嶽のごとく、其香しきこと万朶まんたの櫻の如く、其秀しう其芳萬國ばんこくに傳たぐひし難し、我如何にして斯夫を欺くべけんや、彼の正氣は時に鬱屈すると雖も、明德再び光を放つ時は、宇宙に存する渾すんての善なるもの渾ての美なるものは彼の認むる所となるなり、偽善ぎぜん諂媚てんびは彼の最も嫌惡する所なり、我は彼の威嚴を立てむが爲めに我の良心に従はざるを得ず、唯願ふ神よ、若し彼に誤解あれば爾の聖靈の力に依てこれを氷解せよ、若し彼に迷信の存するあれば爾の光を以てこれを排除せよ、而して余再び彼に歸し、彼再び我に和し、舊時の團樂だんらくを回復し、我も彼の一臂ひとひとなり、彼をして旭日あさひの登るが如く、勇者の眠より醒めしが如く、此歷史上危急きききうの時に當て世界最大國民たらしむるの一助たらしめよ、余は知る誤解の爲めに離別せし夫妻が再び舊もとの縁に復するや其情愛の濃なる前日の比にあらざる事を、余も亦此國に入れられ、此國も亦其誤解を認むるに至らば、其時こそ余の

國を思ふの情は實に昔日せきじつに百倍する時ならん。

嗚呼余は良人を捨てざるべし、孤獨彼を思ふの切なるより余の身も心も消え行けど此操みさををば破るまじ、よし余は和解の來る迄此浮世にはながらへずとも、何時いつか良人が余の心の深底を悟らん時もありぬべし、貞婦の心の一念よりして彼の改むる時もやあらむ、最終まで忍ぶものは幸なり、余も余の神の助にて何をか忍び得ざらんや。

第二章 國人に捨てられし時 現代語訳

愛国心は、人間の最も誠実な気持ちです。私たちは、自分の両親や妻、子を愛するように、国を愛すること強いられているわけではありません。愛さずにはいられないから、自然とそうしているのです。普通の感覚を持った人間であれば、自分に命を与えてくれた故郷の国を愛さないはずがありません。鳥や獣でさえ自分の住み家を認識しているのですから、人間ならなおさらのことです。かつて、ユダヤの愛国者がバビロン川のほとりに座り、故郷シオンを思い出し、涙を流しながら詩を吟じました。

エルサレムよ

もしも私があなたを忘れてしまうなら

この右手もその巧みさを忘れるがよい。

もしも私があなたを思い出さず

エルサレムを至上の喜びとしないなら

私の舌は上あごについてしまえばよい。

(詩篇百三十七篇)

これが愛国心です。これ以上でもこれ以下でもありません。この純粹な感情は、私たちの魂に宿るもの、いや、

魂の一部であって、外から学ぶものではないのです。

「どうすれば愛国心を育てられるのか？」という問いを、私はしばしば耳にします。「国民的な文学を教えるべきだ」「国歌を歌わせるべきだ」といった意見もあります。しかし、人間が普通に成長すれば、心が発達し体が成長するように、愛国心も自然に発達するはずのものです。義務として愛国を口にする国民は、愛国心を失いつつある国民です。親孝行を声高に主張する子は、本当の孝行者ではありません。愛国を口にするばかりで、愛国的な行動がなくなってしまうです。私は国を愛する人間でありたいのであって、愛国について議論する人間にはなりたくないのです。

ですから、私が「私の日本を愛しています」と言うのは、決して自分の徳を褒めているのではなく、ごく普通の人間として正直な気持ちを述べているだけです。私は、アメリカが日本よりも豊かで技術が進んでいることを知っています。しかし、富や技術があるからといって、私が日本に抱く愛情をアメリカに与えることはできません。イギリスの政治、イタリアの芸術、ドイツの学術、フランスの法律が、私を日本人であることを嫌いにさせたことは一度もありません。コトバクシ山が富士山より高いと言われても、富士山が私の心呼び起こす感情の百分の一さえ、コトバクシ山のために感じることはありません。いや、コトバクシ山を見て、かえって富士山を思い出し、ミシシッピ川を渡って石狩川や利根川を思い出すのです。これが本当の気持ちです。決して私一人の感覚ではなく、ごく普通の日本男児なら、この感覚を持たない者は一人もいないはずです。

しかし、もし愛国心も本当の気持ちならば、真実と真実の神を愛することもまた本当の気持ちです。そして、

完全な社会では、この二つは決して対立することはありません。国のために神を愛し、神のために国を愛し、国民全員が神聖な愛国者となるべきです。そのような社会で、もし人が国に見捨てられたとしたら、それはすなわち神に見捨てられたことです。その時こそ、まさに「人々の声は神の声」(*Vox populi est vox dei*)であり、国に見捨てられたところで、天にも地にも訴えるべき人も神も存在しないのです。

ですが、この世には本当に愛国者でありながら、国民に見捨てられた人々が少なくありません。イエス・キリストがその一人、ソクラテスが二人目、スキピオ・アフリカヌスが三人目、ダンテ・アリギエーリが四人目です。そして、公平な歴史家が判決を下す時、これらの人々の場合、罪は国民にあり、見捨てられた彼らは無罪だと宣告しました。

私は、現在の私自身が不完全だと認めるのと同時に、今日の社会を完全なものだと認めることはできません。そして、私が国民に見捨てられた罪は、あるいは私にあるのかもしれませんが。私の不注意がその一つ、行き過ぎた言動がその二つかもしれません。私の心の中にはまだ名誉欲が消えずに残り、欲望が時に力を振るうこともあります。私がこのような不幸に陥ったのは、おそらくこれらのせいでしょうか.....

.....
ああ、今こんなことを言って何になるでしょう。こう書き記すことさえ、密かに自分を弁護していると、私の愚かさを笑う者もいるでしょう。今は口を閉ざすべき時です。そして、感謝すべきは、私が黙っていることができるということです。もちろん、普通の感情としては耐えられるものではありません。私は国民を後ろ盾として、

外国人に友を求めないように努めました。私は「日本狂い」と称されて、かえって大いに喜んだものです。しかし今、この頼りにしていた国民に見捨てられて、私は帰る故郷もなく、求める友もない状況になってしまいました。こうなることが分かっていったなら、外国に友を作っておけばよかった。こうなることが分かっていったなら、私の国を高めるために、強く外国を非難することはしなかったでしょう。今の私の立場は、憐れな女性が、頼りにしていた夫に貞操を尽くすためにひたすら夫を褒め称えた後、些細な誤解からこの最愛の夫に離縁された時のようです。世の中に身を隠す家もなく、他人に顔を合わせることもできず、孤独で淋しさは言い表せません。

この時、ああ神よ、あなたは私の隠れ家となりました。枕をする場所がなくなつて、私はあなたの懐に入りました。地に足がつく場所がなくなつて、私の心は天をさまようようになったのです。周囲の暗闇が天体を観察するのに必要なように、三層の天に昇り、永遠の慈悲に触れたいと願うなら、下界の人間関係から遮断されるに越したことはありません。国民は私を捨てましたが、私は霊界に受け入れられました。

この国の素晴らしさは、今日まで私の目を曇らせていました。どうすればその資源を開発できるか、どのような国民教育の方針を取るべきか、どのような政治戦略で海外に対応すべきか、その世界に負う義務と天職は何だろうか。ペリクレス時代のアテネ、メデイチ家のフイレンツェ、エリザベス女王のイギリス、フリードリヒ大王のプロイセンが、次々と私の目に浮かび、我が国をこれに倣わせようか、あれに倣わせようかと、寝ても覚めても私の思考はこの国から離れませんでした。本当に昔のギリシア人は、現世を最高の楽園と信じ、彼らの思想が現世の外に出ることはめつたになかったそうですが、私も私の国に満足し、この世に勝る世界は詩人の夢想や牧

師の説教で聞いたことはありませんが、私の心には実在しなかったのです。

国民に見捨てられてからはそうではありません。私の実業論は何の役に立つでしょうか。誰が裏切り者の富国策を聴くでしょうか。私の教育上の主義や経験に何の意味があるでしょうか。誰が自分の子弟を不忠な家臣に預けるでしょうか。私はこの国にいますが、この国のものではありません。この国に関する私の意見は地の底に埋もれ、私は目も口もない役立たずの人間となりました。

地に属するものが私の目から隠された時、初めて天のものが見え始めました。人生の最終的な目的とは何か、罪人は罪を洗いきよめる道があるのか、どうすれば純粹さにたどり着けるのか。これらの問題が今は私の心をすべて奪っています。そして、目を上げて天上を望めば、栄光の王が神の右に座り、ソクラテス、パウロ、クロムウェルといった人々が数えきれないほどその周りに座っています。いばらの冠をいただきながら十字架に登ったイエス・キリスト、未来を論じながら毒を飲んだソクラテス、異郷ラヴェンナに追放されたダンテ、その他多くの偉大な魂が、今は私の親友となり、詩人リヒテルとともに天の使いに導かれながら、惑星から惑星へ、星から星へ、霊界の広大さを探求し、この地では決して咲かない花、この地ではまだ見たことのない宝玉、聞いたことのない音楽、味わったことのない香りを、私は本当に思いがけない国に入り込んだのです。

この経験は、私にとって世界文学の注釈書となりました。エレミヤの嘆きは、今や注釈書に頼らずともはつきりと理解できるようになりました。追放された作品として見て初めて（ダンテの）『神曲』を理解できるのです。特に、キリスト自身の言行録は、国民に見捨てられていない者がどうしてその広さ、その深さを探求できまし

ようか。そうです、私は私の国民に見捨てられてから、世界人（Weltmann）となりました。かつて、ホリヨーク山の山頂で、宇宙学者フンボルトが自筆で署名しているのを見ました。

Alexander von Humboldt,

In Deutschland geboren,

Ein Bürger der Welt.

ドイツに生まれた、世界の市民

アレクサンダー・フォン・フンボルト

ああ、私も今は世界の市民です。この国に生まれたことで、この国の外に国はないと思っていた狭い考えは、今や完全に消え去り、小さいながらも世界の市民、宇宙の人となることができたのは、私が国民に見捨てられたという、めでたい結果の一つなのです。

では、宇宙人になったからといって、私は私の国を忘れたでしょうか。ああ神よ、もし私が日本を忘れるなら、この右手にその技を忘れさせてください。もし子がその母を忘れられるなら、私は私の国を忘れることができるでしょう。無理やり離縁状を渡された妻がますますその夫を慕うように、見捨てられてからは国を慕う気持ちがありますますます強くなりました。朝、夫を見送ることもなく、夕方、恋人を迎えることもなく、今は孤独の身となり、整えるべき家もなく、暇を持て余して他のことに心を向けることもできるとしても、朝な夕なに他の女性がその夫を労わるのを見て、私だけが昔の幸せを忘れることができませんようか。ああ神よ、私の夫（日本）が安泰であ

るようにしてください。彼の行く道が穏やかであるようにしてください。今私は彼につきまとい、心から尽くすことはできませんが、もし私の祈りが彼を守る力になるなら、この身分の低い女の祈りを受けて、彼の歩みを導いてください。そしてまた、もしこの身が彼のために必要とされるなら、いつでもあなたの御心に任せ、彼のために使ってください。この身はあなたのもので、あなたのために彼に与えられたものなのです。私のものではないこの命は、彼のためならいつでも捧げると、すでにあなたの前で誓ったことです。

しかし神よ、もし御心ならば、私を再び私の夫の家に帰らせてください。もちろん、私はあなたを捨てて夫の元に帰ることはできません。それはあなたに対して罪であるだけでなく、夫に対して不貞になるからです。あなたがご存知のように、私の夫（日本）には天地の正しい気が集まっています。その雄大さは壮大な山々のようであり、その芳しさは満開の桜のようです。その秀でた点、その美しさは、どの国も比類ないものです。私がどうしてこの夫を欺くことができましょうか。彼の正しい気質は時に鬱屈することもあります、その優れた徳が再び光を放つ時、宇宙に存在するすべての善なるもの、美なるものは、彼が認めるものとなります。偽善やへつらいは彼が最も嫌うものです。私は彼の威厳を保つために、私の良心に従わざるを得ません。ただ願うのは、神よ、もし彼に誤解があるなら、あなたの聖霊の力によってそれを解き、もし彼に迷信が残っているなら、あなたの光をもってそれを取り除いてください。そして、私が再び彼のもとに帰り、彼が再び私と和解し、昔の団らんを取り戻し、私も彼の一部となつて、彼が朝日が昇るように、勇者が眠りから覚めたように、この歴史上重要な時に、世界最大の国民となる一助となるようにしてください。私は知っています。誤解のために別れた夫婦が再び元の

縁に戻ると、その愛情の深さは以前とは比べ物にならないほど濃くなることを。私もまたこの国に受け入れられ、この国もまたその誤解を認める時が来れば、その時こそ、私が国を思う気持ちは、昔の百倍にもなるでしょう。

ああ、私は夫（日本）を捨てることはしないでしよう。孤独の中で彼を思う気持ちがあまりに強くて、私の体も心も消えそうですが、この貞操だけは破りません。たとえ和解が来るまでこの世で生き続けられなくても、いつか夫が私の心の奥底を悟る時が来るでしょう。貞淑な妻の一途な思いによって、彼が変わる時もあるでしょう。最後まで耐え忍ぶ者は幸いです。私も私の神の助けがあれば、何でも耐え忍ぶことができるでしょう。